口にはこんでいた光景は印象に残っている。その夜、10時半頃に会議が終了したあと、未婚の母たちとパブに出かけた。パブではビール小ジョッキ1ぱいが約３０ペンス（約１３０円）。東ロンドンのクレイマンツ・ユニオンのあった地区は貧しい下町を再開発し、団地にかえつつあるような一画だったが、彼女たちが「こここそ本当のロンドン。あなたが泊っているマーブル・アーチはロンドンではない。」と言い放ったのを記憶している。

さて、ラディカルな若いケース・ワーカーたちの組織、ケース・コンは尋ねていってみると、すでに一定の役割を終えて１９７７年に解消、これらのケース・ワーカーたちは公務員組合（ＮＡＬＧＯ）に加入して、労働組合運動のなかで福祉権問題がとり上げられるように行動しているということであった。クレイマンツ・ユニオンの人たちとケース・ワーカーたちの間には抜きがたい不信、敵愾心があるが、しだいにクレイツマン・ワーカーにも労働組合と連帯、共同行動をとっていくうごきがみられるということであった。

こうした各階層の社会保障の権利運動（イギリスで Action for Welfare rights という場合、社会保障＝所得保障に対する権利運動をさしていて、ほとんど社会福祉サービスを含まない。その点で、わが国で、Welfare rights を「福祉権」と訳すことには若干問題がないわけではない）をになっているオルガナイザー、調査研究員は、筆者が紹介を受けた範囲内ではすべて労働党員であって、同党に批判をもちながらも、その中で行動している人たちであった。同党のそのような幅の広さをあらためて感じたしだいである。

帰国の途上、森嶋通夫・ロンドン大学教授の「イギリスと日本」を読んで、旅行中見聞したことと考えあわせ大いに参考になった。森嶋教授が強調されるように、我々もイギリス病をこそむしろ積極的に受け入れるべきなのであろう。市民１人ひとりの人間性を大事にし、自由尊重し、かつそれを社会保障制度の思想的基盤とするためにも。（１９７８年７月３１日）

フ　ラ　ン　ス　雑　感

亜細亜大学　　藤　井　良　治

総選挙の終った直後の３月末から4月末までの１か月、フラススに滞在しました。わが国でもその前後の状況は詳しく報道されていますが、フランスでは新聞、雑誌が総選挙に敗れた左翼陣営の内紛、とくに共産党のそれを連日報じていました。左翼連合勝利の夢は蜃気楼のように消え、結局はお互いを批難する罵声だけが残ったようです。

訪仏の目的はいくつかありましたが、今回の目的の１つは、１０数年ぶりでフランス厚生省（私が最初に行ったとき、労働、人口、保健、社会保障を統括する社会問題省でしたが、現在は、保健と社会保障が１つの省で労働と別になっており、官房や人事、予算局は共通である）を訪問することでした。しかしかつて私が世話になったブロック女史はじめ、何人かの知人は皆定年で退官しており、やや心配でしたが、社会保障局の手紙では、Ｐ氏がよろしく取計るであろうとのことでした。フランス到着後、早速Ｐ氏に電話すると、愛想のよい声が電話の向うから響きました。月曜日に役所の方へ来るようにとのことで、ちょうど週末だったので、もし退屈だったり困ったことがあったらＰ氏の家に電話するよう自宅の電話番号まで教れてくれました。当日厚生省にＰ氏を訪ねると、改めて当方の関心事についてやフランス滞在の目的などを話し、とくに財政調整について聞きたいという希望を伝えました。仕事については午後から関係者に連絡をとろうということになり、午前中は１０数年まえのフランスで

の勉強のことや、わが国のことなど手短かに話したりした。P氏は、最近日本から厚生省を訪ねる人が多いこと、国鉄関係のN氏、M氏、医事評論家のM氏が訪ねて来たことなどを話しましたが、これらの方の中には面識のある方もいらっしゃるので、世間（というより世界）の狭さを改めて感じました。

社会保障財政担当課長のシャドゥラ氏に連絡すると午後が都合がいいと云うので、それでは昼食でもしてゆっくり話をしようとP氏は近くのレストランを予約してくれました。きょう1日フランス語しか口にできないことを考えるとちょっと憂うつになったけれど、P氏は親切に私の話に耳を傾けてくれました。レストランは厚生省から遠くない静かなブロヴァンス風のレストランで、家族のことや政治・経済のことまで駈け足で話し、ずい分と打ち解けることができました。P氏の仕事は国際関係で、もともと国際公務員として外国勤務が長く、父親の任地アルゼンチンで生まれたのでスペイン語が、また母親がイタリア人なのでイタリア語が母国語同然であり、また父親はコルシカ出身なので、（P家はもとはフィレンツェの出で、ルネッサンス期の枢機卿だったとか）自分もフランスのcitonyen（市民）であるが、フランス人ではない、あくまでもコルシカ人であるとその後も口ぐせのように云っていました。そうしたP氏の背景は厚生省内でも反映されているようで、同僚や上司に対する気づかいにもそれが感じられました。そうしたとき、けげんそうにする私に、いろいろdelicat（微妙）でね、と肩をすぼめて弁解するのでした。予定していたシャドラ氏は会議が招集されたので後日にしてくれないかと云うので、診療報酬関係のブレボー女史に会うことになりました。彼女の部屋は会議室のように大きく、彼女の地位が察せられました。ブレボー女史は昨年バカンス旅行で日本へ行き、日本では大阪の医師会関係者の世話になったと云っていました。こちらの質問も良くなかったのかもしれませんが、診療報酬改訂手続きのこまかいことは余り聞かれず、僅かに印象に残っているのは医療費改訂は marchand de tapis（絨毯売り）に似ているということばでした。万事合理的に解決するお国柄かと思いましたが、いずこも同じように売り手と買い手の駆け引きだということでしょうか。

翌日、シャドラ氏を訪ねてみました。シャドラ氏はまだ30そこそこでしたが、財政調整その他は彼のところですべて作業をしていると云うことで、私はこれまでフランスの社会保障財政とその操作についてフォローしてきたし、また今日の財政調整施行前後の手続きも調べたが、いままでも問題のあった全体的な財政調整が可能になったのかよく分らない、日本でも医療保険の財政調整が何度か問題になったが実現しなかったと説明すると、フランスでも厚生省内部で今日の財政調整に賛成している者は1人もいないと云っていました。今回の財政調整は大蔵省が一方的に推進したもので、彼個人としてはナンセンスだと思うという返事でした。何故かと聞くと、黒字制度と赤字制度が存在するならば調整の意味があるが、財政調整における最大の負担制度である一般制度そのものが赤字というのでは、赤字のたらい回しにすぎないからだということでした。財整調整のフィロゾフィーといったものはあるのだろうかと聞くと、そんなものはないとのこと。でも現在のような人口要因財政調整方式が採用されるまでにはいろいろな方式が検討され、とくに私もお世話になったことのある会計院のネッテル氏に相談してきたとのことでした。しかし、わが国に比べて正確な被保険者統計がとりにくいフランスでよくそれを基礎に財政調整が行なわれるものと感じましたが、それについては後日全国金庫の財政部長デュラン氏が、いや不正確な基礎統計をめぐって、各制度の関係者がシャドラ氏のところで喧喧ごうごうの議論を毎回闘わしているんですよ、と云ったことばで、舞台裏の一端が覗けたような気がしたのでした。

財政調整のメカニズムは、一部特別制度と一般制度との間の財政調整（とは云っても一般制度が一方的に負担するためのものですが）を一般化したもので、被用者間の財政調整方式は目新しくありませんが、ある意味で画期的なのは自営業者制度と被用者制度の間の財政調整です。前出のデュラン氏は、被用者間の財政調整は止むを得ないし納得もするが、こと自営業者制度との財政調整はさまざまな基盤（被保険者構成、所得等）が違うので納得できないと述

べていました。デュラン氏が挙げた反対論の主な理由は、①拠出努力が違う（所得把握がいい加減である）こと。②被用者の場合、その家族が被用者である場合は全員が被用者に数えられるのに対し、農業自営者らの場合、農業に従事していても被用者と算定されないこと。このことは、場合によっては被用者制度を財政調整の受取制度とするほどの大きな要因であること。③さきにも触れたが、統計がいい加減で、１００万人も誤差が出るような統計を基礎にして負担額が算定されるのは不合理であること、などです。とに角、各制度とも自制度に有利に事を運ぶために、財政調整の基礎数字を確定するために招集される委員会の討議は大変であるとのことでした。

ところで、フランス医療保険の財政状況は赤字続きで、主として保険料率の引上げによってカバーしようとして来たが、１９７７年度だけは特別で、赤字が大幅に減りそうだということでした。その理由の１つは、バール・プランと呼ばれる政府の物価政策により診療報酬の引上げが少なかったことで、ちなみに一番上昇率の激しい入院費は１９７５年度３５％、１９７６年度２８％に対して、１９７７年度は１６％だということもあります。もう１つの理由は、経済の停滞が需要を抑えたとともに、供給側の意識にも作用したと見られること、新聞やテレビで医療費問題がよく知られるようになったこともあるとのことです。しかし、今年に入って、再び医療費は上昇し始め、医療保険財政にとって苦しい年になりそうだとデュラン氏は語っていました。

医療保険の赤字と云えば、この赤字の処理はどうしているかが長いこと疑問でした。以前は、年金や、特に家族手当とのどんぶり勘定でやってきたようだけれど、一体どうなっているのか聞いたところ、財政調整の被用者間調整による負担分は別として、自営業者制度との財政調整分は全額国庫負担となっており、また、赤字に対しては国庫からの借入金によってやって来ており、借入金を返済したことは一度もないとのことで、それで済むのかと聞きますと、皆が忘れるんですよとデュラン氏は片目をつぶって笑って見せました。

フランスで訪ねたもう１人は CREDOCのミズライ氏です。CREDOCは 消費調査研究所ですが、ミズライ氏は完全な民間機関だと云ってはいますが、実質は半官半民的な組織のようです。CREDOCの前医療経済部長のローシュ氏とは１０年以上前から文通をしていましたが、今回始めて訪ねようと思ったら急死されたばかりで、そのあとを継いだミズライ氏はフランスでも珍らしく小柄な人で、あご髭を生やしていました。１０年ほど前にローシュ氏のフランスの医療消費に関する論文を雑誌に抄訳したのを送ったことがありますが、その写しを取り出してローシュ氏に貰って持っているのですよ、と見せられたときには私の方が驚いてしまいました。CREDOCは3つの研究部門に分れ、その１つが医療経済部でミクロ経済に関する研究をミズライ氏が担当し、マクロ経済に関する部門をサンディエ女史が担当しています。医療消費に関する調査は、ちょうどわが国の家計調査と同じような大規模なもので、INSEE（大蔵省統計経済研究所）の調査員ネットワークを使っての訪問調査ですが、この他の研究は厚生省、大蔵省、それに全国医療保険金庫等の調査研究が主で、その集計、解析の多くはINSEEのコンピュータをフルに使ってやっていました。今日はワイフが家の用事で来られないので紹介できないけれどと云うので、よく聞きますと、ミズライ氏の論文は必ずA.et A.ミズライとなっていますが、その一方のAは奥さんで、もう一方がミズライ氏とのことです、しかも２人ともCREDOCに入って以来机を並べているのです！

もしよかったら安食堂だけれどいつも自分たちが食事をするところで昼食をご馳走したいのですが、と云ってくれ、昼食を一緒しました。たまたまそこにサンディエ女史たちも来ており、彼女と一緒に居たル・モンド紙の医療担当記者に紹介してくれました。昼食の間、私がフランスで会った厚生省のシャドラ氏や全国金庫のデュラン氏のことを話すと、皆よく知っている人たちだと云いまた全国金庫の前事務総長のミシェル氏とも親しかったけれど、６８年の社会保障改革で追われた形になり、大蔵出身のブリウール氏になったことなど話してくれました。いろいろ話して、ミズライ氏は最初トポロジーをやって学位をとったけれど、後に統計に変わり、そして現在の医療経済の仕事をするように

なり、現在医療経済で学位論文を書いているとのことで、私も統計研究所のデュゲ教授についたことがあると云うと、ミズライ氏の指導教官もデュゲ教授だったと云うので一層話がはずみました。

その他、社会保障予測モデル作成を担当している大蔵省のローネー氏に会うことも目的の一つでありましたが、一向に連絡がとれず、日本の経済研究所に来ていたことのあるINSEEのソッテル氏を通じて連絡をとってもらいました。ローネー氏は第6次と第7次の5か年計画における経済予測モデルの社会保障サブモデルを担当している中心的人物の一人です。 約束の時間に行くと、選挙後の大臣説明資料の作成が間に合わないからとか会議が終らないとかで3度目にやっとゆっくり話しをすることができました。最初のとき、彼のオフィスのドアに"Pe jense, donc je ne suis pas" という貼り紙があり、私がドアの前で戸惑っているので、通りがかりの同僚が「きみにお客さんだよ」と取り次いでくれましたが、結局駄目で、二度目は会議から帰らないので彼の秘書である中年の婦人と30分程話をして帰りました。彼女は、息子に買ってやるバイクをホンダにしようかスズキにしようかと迷っていると云うので、私はプジョーの自転車にのっていると云うと、 同僚に「この日本人はプジョーの自転車を使ってるんですって、私のとこは日本製のバイクにしようと云うのに」といって喜んでいました。3度目の正直で、帰国を目前にしてやっとローネー氏と落着いて会うことが出来、いままで使っていた経済モデルDECAモデルからDMSにレベルアップしたので、社会保障モデルも一部手直しをしているのと、四半期ごとの新データによるパラメータ修正が7月頃に出てくるので日本に送ろうとのことでした。帰りぎわ私の持っていた日本語の資料の表紙を見て「それは日本の文字ですね。とても美しい。私の親しい画家マチュウも日本の書が大好きなんですよ」と云うのでした。

この他にもまだまだ報告したいことはいろいろありますが紙数の関係もあり他の機会にしたいと思います。最後に、ル・モンド紙のトップ扱いの2頁にわたる「われわれはいかに日本人たりうるか？」という論文に触れたいと思います。これは日本人の目からも興味あるもので、資源問題、社会体制、賃金、公害、価値観、宗教等さまざまな側面から日本を考察し、最後に日本人（だけでなく東洋人）の思考法が、アリストテレス以来西洋文明を支えてきた2値論理と異なる3値論理であり、この思考様式に三百年来世界を支配してきたデカルト精神を超越する何ものかを期待しているが、百年来われわれが追いつこうとしてきたデカルトの国の、自信喪失の声と聞こえて、感慨深いものがありました。